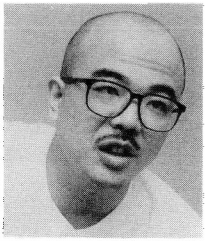
花村萬月

Hanamura Mangetsu

セラフィムの

セラフィムの夜



花村萬月（はなむら・まんげつ）

1955年２月、東京都生まれ。中学を卒業後、ディスコやキャバレーのバンドマンや喫茶店経営などを経て、バイクで全国を放浪。あんパン、牛乳に寝袋だけの生活に飽きた31才の時、旅行雑誌『旅』に出した紀行文が入選し、作家を志す。89年に『ゴッド・ブレイス物語』で第２回小説すばる新人賞を受賞し、プロデビュー。愛と暴力をテーマに、独自の世界を開拓している。代表作に『ブルース』『眠り猫』『風に舞う』などがある。

セラフィムの夜

1994年９月20日　初版第一刷発行
11月１日　第二刷発行

著　者　花村萬月
© MANGETSU HANAMURA 1994
発行者　五十嵐光俊
発行所　株式会社　小学館

〒101-01　東京都千代田区一ッ橋２－３－１
電話／編集　03（3230）5957
業務　03（3230）5333
販売　03（3230）5739
振替／東京８－200番

印刷所　凸版印刷株式会社　　Printed in Japan

■Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。
■製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、「業務部」あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

¥1500－　　ISBN4-09-379461-8

セラフィムの夜

装丁装画……荒川じんぺい
画像処理……木山紗澄未
（千代田スタジオ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

――セラフィムの夜　目次――

なんとなく 7
たくさんの血 17
生理の血 28
天使の肉体 39
飯能のソープ 50
隙間のある恍惚 60
閉じられた瞳 71
ないものねだり 82
触診 92
合成皮革の診察台 102
となりのマンちゃん 113
勘違い 123
熾天使の夜 134
流れ出した命 144
それぞれの血 155
染色体46XY 167

六二、四〇〇分の一　177
最高の女　187
深夜の彷徨　196
息をしていない　206
生命の交わり　216
鷲鼻の老人　226
逃避行　236
釜山沖、午前三時　246
パンチョッパリ　256
入国審査　272
外国人専用休養街　285
セマウル号　296
ソウルへ　306
連れ込みホテル　318
挽歌　332

――なんとなく――

革の匂い、布の匂い、鉄の匂い、髪の匂い、汗の匂い、皮脂の匂い。そういった生々しい匂いが涼子の鼻腔にあふれかえっている。

借り物の、他人の面であり、防具一式である。清潔な香りではない。しかし面をつけるとき、密(ひそ)かにうっとりする。

性的というにはおおげさな、だが、あきらかに性的な気分になる。

もし、この場に誰もいなければ、掌(てのひら)のかたちに黒く汚れた柄革にそっと鼻を近づけて、幽(かす)かに立ち昇る鞣(なめ)し革の香りと、汚れの醸しだす猥雑な匂いを嗅ぐかもしれない。

もちろん涼子は、こういった想いを口にしたり実際に竹刀の柄革の匂いを嗅いだりしないだけの自制心は充分にもっている。

それらは、あくまでも涼子のイメージの中だけのことである。実生活の涼子は、もう少し手抜きをしろと夫が苦笑するくらいの清潔好きであった。

涼子は生まれつき匂いに敏感だった。いま顔の周囲に漂っている、面に染みこんだ生き物の匂いは、幼い頃の記憶につながっていく。性に目覚める年頃だ。小学校の六年だった。仲のいい少

女が涼子の部屋に遊びにきた。
家人は留守だった。しばらくは女子のあいだで流行っていた編み物の情報交換をしていた。
涼子は彼女と軀を寄せあって極極太の毛糸とアフガン針の十三号を使うクロス・アフガンと呼ばれる交差編みを習っていた。
彼女はませていた。彼にあげるの、とラフなバルキー・セーターを編んでいた。涼子もまねをして、わたす相手のない男物のセーターを編んだ。
彼女は生意気に姉のコロンを肌にふり、柑橘系の香りをさせていた。それでもお互い、少女なりの、酸っぱいような、綿菓子のような匂いがしていたと思う。
涼子はまだ子供の軀をしていた。
彼女は胸がふくらみはじめ、すでに大人びた括れの萌しがあらわれていた。
時々きつく腕を組み、ふくらみはじめた胸を押し潰すようにしながら頬を上気させていた。
淡い性の目覚めだった。芯のできた乳房、硬さを増した乳首、なんともいえない苛立ち、切ない痛み。
その急激な変化に驚き、愛しみ、なだめようとする気持ちと衝動は、後に理解できるようになったが、その頃は、彼女の熱っぽい頬と潤んだ瞳に、涼子はある畏れを抱いたものだ。
当時は、涼子の実家のあるあたりも武蔵野の面影をまだ強く残していた。窓の外の木々は、完全に葉を落とし、百舌の声がした。
木枯しが吹き荒れていたが、部屋のなかはセントラル・ヒーティングで汗ばむほどだった。窓

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ガラスも外との温度差で濡れて、たっぷり汗をかいていた。
『ねえ、涼ちゃんはキスしたこと、ある？』
いきなり彼女に問われて、幼い涼子は口ごもった。
『……美恵ちゃんは、あるの？』
彼女は微笑をかえしただけだった。しかし微笑には子供らしくないねっとりと粘るものが含まれていた。しばらく間をおいて、彼女は囁いた。
『わたし、涼ちゃんとキスしたいな』
彼女に見つめられて、涼子は無力感を覚えた。昂るよりも、逆らいがたい力を感じた。涼子は掠れ声で返事した。
『――いいよ』
涼子の初めてのキスは同性だった。彼女は舌を使うことまで知っていて、涼子をリードした。息苦しくなって唇を離すと、彼女はとがめるように言った。
『きつく吸わなくてはだめ』
ふたたび唇をかさねた。吸いあった。彼女の唾液は、どこか漬物のような匂いがした。涼子は決してその匂いが嫌いではなかった。
いまでも浅漬けが食卓にのぼると、彼女の唾液の匂いを思い出す。胸がきゅっとなり、食欲とは別の唾が湧きあがるのを感じる。
彼女との口づけは、ずいぶん長い時間にわたったが、彼女も、涼子も、けっきょく苛立ちを覚

え、疲労して、軀を離した。
口づけだけでは成就しない、というわけだ。その解消法を、彼女はその歳なりのことばで、涼子に教えた。
『くんくんしたこと、ある？』
涼子は意味がわからなかった。正直に、ないと答えた。彼女は得意そうに、頷(うなず)いた。まるで教師のような口調で言った。
『こんど、ひとりのときに、くんくんしてみなさい』
『くんくん……』
涼子は首をかしげた。彼女は、くんくんという幼児語で表現された行為を、かなり直接的かつ具体的な仕草で涼子に教えた。
その行為のいちばん最後の総仕上げが、中指を鼻に近づけて、指先に漂う自分の残り香を嗅ぐ、つまり、くんくんという仕草だった。

「あいかわらず先輩はとろいなあ」
大島の声に、涼子は我に返った。みんな防具をつけ終わっていた。大島は竹刀を杖がわりにして涼子の傍(かたわ)らに立ち、ぼやいた。
「これで、誰よりも強いんだから、まいっちまうぜ」

涼子は大島を無視した。木枯らしの吹き荒れる音が、耳鳴りのように聴こえる。白い吐息を凝視する。性的な気持ちを押し隠して、面ひもを締めあげる。

締めあげると、性的な意識に非現実的な気分が加わって、足が地についていないような、微妙な浮遊感に支配される。

面の横枝梧を通して覗く世界は、まるでテレビ・ゲームの画面のようだ。

視界をさえぎる横枝梧の数は十三、四本であろうか。この横枝梧と、面の中心に、縦に一本はしっている中枝梧を通して見る世界。楕円形に区切られていて、戦闘機の照準のように座標軸が切ってあるようで、じつに非現実的だ。

そのむかし、格闘技は現実的だった。相手を殺すため、自分が生き残るために、修練を積んだ。

しかし、現在は、とりあえず殺し、殺されることもなく、美術大学の体育館で、どちらかといえば運動神経の鈍い画学生が黄色い奇声をはりあげて、ストレスの発散をする。

板張りの体育館は氷のようだ。一歩踏み込むと、指先がすっと冷えていく。木肌に体温が奪われていく。その瞬間、涼子は醒める。

涼子はむかしから準備運動が嫌いだった。関節をほぐしたり、ランニングしたりするのが面倒だった。学生だったころは、しかたなくやったが、OBのいまは、まったくやらない。

だいたいが美大の剣道部である。そのあたりはむかしから、じつにいいかげんだった。最近も入部したばかりの女の子のアキレス腱断裂という事故があったが、準備運動はあいかわらず各人

の自由裁量にまかされていた。
準備運動は嫌いだが、素振りは好きだ。素振りをするのにわざわざ面をかぶることもないのだが、涼子は完全防備で重めの竹刀を中段に構える。
涼子の剣道は、基礎ができている。竹刀を振りあげたときも、左右の掌が柄にぴったり密着している。
非力である。持久力もいまいちだ。しかし、タイミングは抜群だ。だから、振り下ろした竹刀からは、まわりの男よりも鋭い風切り音がする。
足さばきも抜群だ。左足の踵(かかと)は紙一重などというが、涼子の踵はまさに床から紙一重、浮いている。涼子は素振りを続けながら、送り足、開き足、つぎ足、歩み足と、軽快なフットワークで体育館の隅を移動する。
いつものように、幾人かが涼子のまわりに集まってくる。じっと涼子の動きを注視する。いわゆる見とり稽古だが、涼子の動きに性的な想いを抱いている者が大部分である。
学生時代は惰性で行っていた剣道であるが、こうして週に二回ほど、気まぐれに竹刀を振ると、初めて竹刀を握った中学生のころの昂った気持ちがよみがえる。
だから潑剌としている。修業であるとか、鍛錬といった重苦しいものは、涼子の動きにはない。熟達したダンサーが踊っているかのような軽やかさがある。
「先輩、お願いします！」
大島が涼子の前に跳びだした。涼子は一瞬ためらった。涼子は大島が苦手だった。正確に言え

ば、嫌いだった。
嫌悪感を隠して、自然体に構えた。顎を軽くひいた。あまり視線を合わせたくないのだが、大島を正視した。
奥二重というのだろうか。大島の眼は、厚ぼったい瞼が蒲団のように被さって、一見眠たげだ。しかし、瞳自体は、なんともいえない濁った光をたたえて意外に鋭い。
大島は今時めずらしい、古いタイプの画学生だった。本気でゴッホやブラマンクに心酔していて、無頼を気取っていた。
涼子は立礼した。大島は壊れた人形のように首だけぴょこんと曲げた。
直後、首を斜めにかしがせたまま、跳びこんできた。
涼子は虚をつかれた。立礼を終え、中段に構えようとしたときである。かろうじて飛び退いた。
大島は左手だけで竹刀を振り回した。剣道などといえる代物ではない。おおげさに風が哭(な)いた。喧嘩に負けそうな子供が闇雲に腕を振りまわすのに似ていた。
涼子が避けると、派手にダイビングした。軀ごと涼子にぶつかった。竹刀の柄頭が涼子の鎖骨を直撃した。
ふたりは絡みあった。横転した。涼子と大島の面がねが衝突して、火花が散った。金属的な軋み音をたてた。涼子は後頭部を強打した。
空白――。

大島の痩せた軀がのしかかっていた。息が直接涼子にかかっていた。ニンニクをきかせた餃子でも食べたのだろうか。ひどい口臭がした。おまけに二日酔いにつきものの醱酵したような胃液とアルコールの匂いまでする。

吐き気がした。それほど不快な匂いだった。涼子は狼狽していた。嫌悪に叫び声をあげそうになる。面越しに、大島の荒れてひび割れた唇がいやらしく歪んだ。

大島は笑っていた。笑いながら、囁いた。

「漢和辞典で涼子の涼の字を調べてみたんですよ」

なにを言っているのか理解できなかった。涼子は床に押えつけられて、動転し、呆然としていた。

「涼って、もともとは酒を水で薄めるという意味だそうです。そこから、思い遣りがないということになったそうです。そのあとに涼しい、という意味がくるんです」

ハッとした。漢字の意味など、どうでもいい。そんなことよりも、大島の膝頭が大垂を折り曲げるように動いていた。

直後、その膝頭は、袴を通して涼子の股間にぴったりと押しあてられた。しかも、大島の膝頭は涼子の核心を圧迫するだけでなく、卑猥な円を描いて動いている。

涼子の唇がわなないた。

大島は満面笑みで、訊いた。

「感じる？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.